

下河辺長流と『挙白集』

大 山 和 哉

はじめに

難波堀江の隠士下河辺長流（生年未詳、貞享三年（一六八六）没）の和歌は、木下長嘯子（永祿十二年（一五六九）～慶安二年（一六四九））の和歌から影響を受けているという点は夙に指摘されるところである。例えば長流によって編纂された地下歌人の私撰集『林葉累塵集』では、その序文で撰歌対象について述べる際に次のように長嘯子に言及する。

中にも近く小塩の山の幽棲にして身まかりたまへりし長嘯子の言の葉は、かの家の集挙白よりふたゝびこれを抜き出だしてこゝにまじふることは、其たぐひなき金玉の声をもて、まきくゝの響きとなさむためなり。

長嘯子は関ヶ原の戦いの折に武將の身分を捨てて隠士となり、京

の東山、後に小塩山に隠棲した。長嘯子が没した慶安二年には門弟の山本春正、打它公軌・景軌父子らによって家集『挙白集』が刊行された。長嘯子の歌風は奇抜なもので、当時の堂上二条派の歌風とは相容れないものであり、翌慶安三年には尋旧坊なる人物により『難挙白集』が刊行され保守的な視点から『挙白集』の和歌が批難されている。さらに後年には『難挙白集』に反駁する書『挙白心評』まで刊行され、論争を呼んだ。

長流は『林葉累塵集』編纂にあたり、この『挙白集』からさらに和歌の選定を行って、「其たぐひなき金玉の声をもて、まきくゝの響きとな」そうとしたという。長流にとつて長嘯子の和歌は「たぐひなき金玉の声」と比喩されるほど賞賛すべきものであり、結果、『林葉累塵集』全一三七〇首のうち、長嘯子の和歌は一〇六首（長歌一首とその反歌一首を含む）収められた（寛文十年刊本）。

また、長流の家集『晩花集』（以下、本稿で『晩花集』という場合は、貞享三年、長流没後に契沖が編纂した系統のものを指す）には、次の二首が見られる。

長嘯子を賛する歌

後瀬山これより後の世々経とも又やは生ひむ椎が一本

小塩山雪をしのぎて高沙の松の姿に見ゆる言の葉

〔晩花集〕一四六三、一四六四

一 一首目の「後瀬山」という地名は、長嘯子がもと後瀬山城主であったこと、及び『萃白集』巻六収録の和文「後瀬山」に見える長嘯子歌「後瀬山のちすむ宿もしひがもとなど落ちぶれてかずならぬ身ぞ」を念頭に置いて用いられたもので、長嘯子のような優れた隠士は今後現れないであろうと讃える。二首目に見える「小塩山」は長嘯子が晩年に住んだ地であり、そこに雪を凌いで立つ松、その葉のように埋もれることなく伝えられていく長嘯子の「言の葉」（和歌）の素晴らしさを詠む。長流が若い頃に長嘯子から和歌の指導を受けたという説もあるが、定かではない。^①しかし隠士として、また歌人として、長嘯子が長流にとって憧憬の対象であったことは確かである。これまでの研究においても「長流の歌は全く旧派堂上歌人の風を脱却し得たとは云はれないが、為兼（稿者注・京極為兼）、長嘯子に私淑して、とにかくに特色のある歌を残してゐる事は、大いに

認めなければなるまいと思ふ^②、「捉われない表現、ザックバラ調、諧謔味といふ作風は、木下長嘯の歌風に於て見られる所であるから、師匠の歌風をうけついでものである^③」、「その歌風は全体的には二条派風であるが、例えば「馬はあれどかちよりいく夜こはた河こは誰ためにぬるる通路（恋の歌とて）」のように、堂上和歌では敬遠された万葉歌を生かす詠歌が散見され、長嘯子和歌の継承を感じさせる^④」など、長嘯子の歌風が長流にも見出せるという指摘がなされてきた。ただし、こうした指摘が長流の和歌を語る上で常套となつていなのに対し、具体的にどのような影響が見出せるのか、長嘯子と長流の和歌に即して述べた研究は見られない。

そこで本稿では、『萃白集』のいかなる点が長流歌に影響を与えたのか、その具体例を挙げつつ検討し、長流の和歌活動の実態、及び当時の歌人達による歌材獲得の方法について明らかにする。

一、『萃白集』歌集部の影響が見られる長流歌

長嘯子の家集『萃白集』は巻一〜五の歌集部と、巻六〜十の和歌部の、全十巻で構成されている。本章では『萃白集』歌集部の和歌に見られる語のうち、長流が意識的に自らの詠作に用いたと思われる語について検討する。

まずは「花踏む鳥」という語を用いた長嘯子歌を挙げる。

(1) 小塩山にて

山田守る秋の鳴子は引きかへて花踏む鳥の枝にかくなり

〔萃白集〕春・三三四、〔林葉累塵集〕春下・一八五^⑤

秋の間、山の中にある田を鳥獸から守るために設けられた鳴子を、春に張り直して、今度は花を踏む鳥から守るために花の咲いた枝に引き掛けるのだ、という。鳥が枝に留まることで花が散らされてしまうことを、おそらくは憎からず思いながらも、鳴子を張って警戒しようとした作である。この歌は『古今集』の物名歌、

(2) 我が宿の花踏みしだく鳥うたむ野はなればやここにしも来る
(四四二、「りうたむの花」)

から発想したもので、「花踏みしだく鳥」が「花踏む鳥」と縮められ、鳴子という素材と取り合わされて長嘯子歌は出来上がった。この「花踏む鳥」という語は長嘯子以前に用例を見出せないが、

長流は次の歌にこの語を用いている。
(3) 降る雨のかゝる脚だにあるものを花踏む鳥を何かいひけん

〔晩花集〕春・二〇二

降る雨の脚、つまり「雨脚」がこんなにも花を散らしてしまうというのに、花を踏む鳥ごときに何をあれこれ言っていたのだろうか。この歌の「花踏む鳥」も、『古今集』四四二番歌を念頭に置いているだろうが、(1)の長嘯子歌が『林葉累塵集』に収録されているこ

とを考えれば、「花踏む鳥」の語それ自体はやはり長嘯子歌から撰取したものと考えて良いだろう。

(1)が(2)に鳴子の素材を加えて成立した歌であるならば、(3)は(2)に「雨脚」の要素を加えて成立した歌といえる。「雨脚」については「床頭屋漏無乾処、雨脚如麻未断絶」(床頭屋漏れて乾く処無し、雨脚麻の如くにして未だ断絶せず)〔杜甫「茅屋為秋風所破歌」〕といった漢語の例があり、これを元に「内裏より御使雨の脚よりもけにしげし」〔源氏物語「夕顔」〕など「雨の脚」の形で和語として用いられることもあった。(3)の歌ではこうした「雨の脚」に、「夜来風雨声、花落知多少(夜来風雨の声、花落つること知んぬ多少ぞ)〔孟浩然「春晓」〕など雨によって散らされる花の姿が描かれている。また、「何かいひけん」という部分については、「なぜ私はこれまで、花踏む鳥に対してあれこれ言っていたのだろうか」と取ることもできるが、「私は」の部分を「人は」のように一般化して考えるならば、(2)や(1)の歌のように、花を踏む鳥ごときにあれこれ言っていた歌への言及と見ることも可能であろう。「花踏む鳥」の語が長嘯子によって用いられた詞であるが故に、(3)の長流歌は(1)の長嘯子歌に応答するかのような歌として見えてくる。こうした狙いが、長流の心底にあったのではないだろうか。

「竹馬」の語も、歌に用例が少ない中、長嘯子と長流に共通して

用例が見出せる例である。竹馬は竹を使って馬を模した玩具で、子供がまたがって遊ぶものである。和歌では『為忠家初度百首』の「竹馬をそのともぶしの契りには世にながらへばとこそいひしか」が早い例として見つかるが、他に『聞書集』『新撰和歌六帖』に一首ずつ確認できる程度で、用例の多い語ではない。⑥ いずれも幼時を思い出し老いを嘆く場面で用いられており、長嘯子には次の例がある。

- (4) 四十あまり今年も暮れぬ竹馬に乗りしや昨日一夜ばかりに

〔挙白集〕冬・一三〇一、「歳暮」中の一首

四十歳を過ぎて迎える歳暮に、竹馬に乗って遊んだ子供の頃のとが昨日のように思われ、一晚で今日になったように思える、と時の流れの速さを嘆く。「竹」と「一節」が縁語となっている。

一方、長流には竹馬の用例が六例見出せる。

- (5) 飽かずして我が手離れし竹馬のまたこまがへる齢ともがな
 (6) 竹馬に道くらべせしそのかみの友は多くぞ先立ちにける
 (7) 春草を野飼にとてもやらざりき我竹馬よいづち往にけむ
 (8) 竹馬は又も見え来で朝夕の隙ゆく駒ぞ前にかげろふ
 (9) …家の園に 生る呉竹 竹馬に 手づから切りて 手綱つけ：
 竹馬にふた、び道をまかせても雪ふる郷にかへる世もがな

〔晩花集〕雑・一二四四・一二四九・一二五〇・一二

五二・二四七九（長歌）・一四八〇（二四七九の反歌）
 いずれも自らの老いを、あるいは時の過ぎゆく早さを嘆く詠である。さほど先行例の多くない語であるにもかかわらず長流にこれほどの用例が見つかるのは、あるいは長流が竹馬に関する個人的な思い出を持っていたためかも知れない。ただ、数少ない先行例に長嘯子の歌があるという点からは、やはり長嘯子の歌が長流の発想の契機となっていた可能性が考えられるだろう。

- (11) 同様のことは次の「犬上」「床の山川」の例でも言える。

- (11) 瀬をはやみ流れて年も犬上やいづれかたけき床の山川

〔挙白集〕冬・一三三二、「林葉累塵集」冬・七五〇

歳暮を詠んだ長嘯子歌である。「犬上」は近江国東部にあった郡名であり、「床の山川」（鳥籠の山川とも）は犬上郡を流れる川。

「床の山」の南を流れて琵琶湖に入り、不知哉川とも呼ばれた。早く『万葉集』に

- (12) 犬上の鳥籠の山なる不知哉川いさとを聞こせわが名告らすな

（卷十一・二七二〇）

と詠まれ、同歌は『古今集』卷十三墨滅歌としても伝わる。長嘯子は「犬上」に「往ぬ」を掛け、年月の流れと「床の山川」と、どちらの方がより激しく、速く流れ去るだろうか、とする。

一方長流歌に、「犬上」に「往ぬ」を掛けた次の恋歌が見られる。

(13) 見し人は衣手離れて犬上や床こそ塵の山となりけれ

〔晩花集〕恋・一一〇一

恋人であったあの人は、今は離れて「往ぬ」（いなくなってしまう）、という文脈から「犬上」を導き、「床の山」の地名から「床」を出して、恋人の訪れがなくなったために床には塵が山のように積もっている、と詠む。「犬上」「床の山」の双方を詠み入れた技巧的な歌である。

そもそも、(12)の歌は後世、様々な歌書の中に取られて有名であるが、「犬上」「床の山」については他に多くの歌例は見出せない。

(11)・(12)以外の用例のうち、長流が見ていたとすれば、三条西実隆家集『雪玉集』に載る「友なしと千鳥はいづち犬上やひとり寝覚めの床の山水」（六五三二）程度であろう。この歌も「いづち往ぬ」と「犬上」が掛詞となっている点が共通するため、長流が意識していなかったとは言えないものの、(11)が『林葉累塵集』所収歌であるという点を考慮すれば、長嘯子歌から発想を借りたと考えるのが妥当であろう。

以上、「花踏む鳥」「竹馬」「犬上」「床の山川」など、和歌に先行例が少ないながら、長嘯子と長流に共通して用例がみられる語について考察を加えた。いずれの語も、先行例が全く無いわけではなく、長嘯子を経由せずに長流が用いた可能性も考えられる。しかしながら

ら、長嘯子を敬愛し、その家集『萃白集』を自らの撰した『林葉累塵集』の重要な撰集資料として用いた長流が、これらの語を使うに当たって『萃白集』の例を意識しなかったということは考え難い。『萃白集』には当時の堂上和歌では用いられないような、和歌に稀な語や表現が多く見られるが、それらはむしろ長流にとって、自身の詠作活動における良い刺激になっていたのであろう。そうして得た歌材を用いつつ、さらに他の素材を合わせることで、長流は独自の趣向を具えた二首を作り出していったのである。

二、『萃白集』和文部の影響が見られる長流歌

長流の和歌の表現には、『萃白集』のうち、巻一～五の歌集部だけではなく、巻六～十の和文部によって着想したと思われる表現も存在する。例えば、長流に次の歌がある。

(14) 天づたふ日を追ふまではなけれどもおのが力ぞ我もはからぬ

〔晩花集〕雑・一二二九

この和歌には『列子』湯問篇に載る、中国の伝説上の人物・夸父の逸話が引かれている。^⑧『列子』湯問篇には次のようにある。

夸父不量力、欲追日影。逐之於隅谷之際、渴欲得飲、赴飲河渭。河渭不足、将走北飲大沢。未至、道渴而死、棄其杖。尸膏肉所浸、生鄩林。

(夸父力を量らず、日の影を追はんと欲す。之を隅谷の際に逐ひ、渴して飲を得んと欲し、赴いて河渭に飲む。河渭足らず、將に北に走りて大沢に飲まんとす。未だ至らず、道に渴して死し、其の杖を棄つ。尸の膏肉の浸す所、鄧林を生ず。)

夸父が自らの力量をわきまえずに太陽を追ったというこの逸話を本説として、長流は(14)を詠んでいる。(14)はこの逸話を用いて述懐歌を詠んだ点が眼目であり、表現上の工夫はあまり見られないと言つてよい。文芸に稀な典拠であるため、まずはそれを三十一字に納めてみるという挑戦そのものに意義があつたのであろう。

この典拠は散文においても用例を見出し難いが、『挙白集』巻七所収「公方家御屏風の歌并序」には、次のような記述がある。

(15) をのれをはからず、なまじるに、古人のあとをまねばんとおもへるおほけなさは、夸父が日かけをかへさんとはげませるがごとし。

これは長嘯子が、徳川將軍家で制作する屏風に和歌を書くよう依頼され、それに対して謙遜するという場面である。「をのれをはからず」「夸父が日かけをかへさんとはげませる」という部分は、(14)の歌と重なっている。日本文学史上ほとんど用いられてこなかった典拠を長流が敢えて使つたのは、国学者としての研究の中で得られた知見である可能性もあるが、やはり(15)の記述を目にしていたことが

契機になつてゐるものと考えられる。

また、次の「になひ出せる」も同様の例と捉えることができよう。

(16) 契沖が出せる題にて冬の歌廿首よみてつかはしける奥に

花もなき冬の山人薪こりになひ出せる歌と聞かなん

(『晩花集』雑・二二〇七)

契沖の出した冬の題に対し、長流が二十首の和歌を詠み、それを契沖の元に送る際に添えた歌である。花の咲かない冬の山で、樵夫が薪として切り出した木材のように、何の花も無く無風流ながら、なんとかこしらえた歌とでも思つて下さい、と自歌を謙遜する。この「になひ出せる歌」は、『土佐日記』の次の部分を典拠とする。

(17) かく別れがたくいひて、かの人々の、くち綱も諸持ちにて、この海辺にてになひ出だせる歌、

(十二月二十七日、後統の和歌は略)

紀貫之の一行が土佐国を出発する際、見送りに来た人々が和歌を詠んで送つた場面である。ここに見られる「になひ出だせる歌」という表現が、長流の歌にそのまま用いられている。

しかし、長流はこの表現を自らの歌に詠み込む前に、『挙白集』の和文部に見られる次の箇所を見ていたのではないだろうか。

(18) うちにごくこゝろの、ほかにあらはれざらんもほいなくくちおしくて、になひいだせるからうたひとつ、やまとうた十ばか

り、かきてつかはす。

(卷八「道円饒別」)

(19) …かたはらなる世すて人、こしおれを一首になひ出たり。

(卷十一「心戒」)

(18)・(19)いずれの例も、長嘯子が自らの和歌を卑下して「なんとか作り上げた」と言うために「になひ出す」の語を用いている。「土佐日記」の例は、漁師が皆で網を担ぎ出すように、見送りに来た人々が浜辺で和歌を作ってくれた、という場面であり、「なんとか作り上げた」という意味合いが含まれているにしても、卑下するために用いられた語ではない。しかし、(16)の長流歌は、(18)・(19)の長嘯子の表現と同じように自らの歌を卑下して言っているものであり、用法としては『土佐日記』より『拳白集』に近い。これは、長流の意識に(18)・(19)の表現があつたためであると考えられる。

次に「落葉衣」の例を見る。長嘯子に次の歌がある。

(20) 題しらず

山風を何にふせぐと人間はば落葉衣のありとこたへん

(『拳白集』雑・一五四九、『林葉累塵集』雑三・一一九九)

「落葉衣」の語は、『後撰集』の次の歌に依るものであろう。

(21) 秋の夜の月の影こそ木の間より落ちば衣と身にうつりけれ

(秋中・三二八)

この歌は、秋の夜、木の間を通して月の光が衣に落ち、落ち葉を

身につけた衣のように見える、と詠む^①。(20)の歌は、寒い山風を何で防ぐのかと人に問われれば、侘び住まいの私には「落葉衣」があるさ、と答えようという。ここでは(21)のように月光が身に映る様ではなく、落ち葉を衣のように身につけた状態を言っており、「落葉衣」という詞だけが転用された形である。

(20)の歌は、『拳白集』巻七の和文「那波道円につかはすことば」にも見える。この章段は長嘯子が那波活所(那波道円)との交流の様を綴つたもので、ある冬の日、長嘯子の元から活所が帰ろうとする折のことを記した次の部分に(20)の歌が見られる。

(22) 冬の日のとくるればいでなんとす。隣のかたの鼻もなどひざ

らんとわびし。木の葉みだりがはしく衣もうすきに、「山かぜをなに、ふせぐ」と、おぼえずながめいでたるに、山づみにやあらん、すがたは見えねどあら、かなる声して、「あとはいかに」とせめかくるに、「人とはゞ」とつゞけて、や、ためらふほど、また「十四はいかにく」ととふを、「落葉衣のありとこたへん」といひはつれば、「わろしく」とつまはじきをす。

活所(ここでは「山祇」に例えられている)の帰り際、木の葉が多く散り、衣も薄いため寒さを感じた長嘯子は、「山かぜをなに、ふせぐ」と思わず口にした。それを歌の五七として聞いた活所は、その後の五七七を詠むよう急かす。長嘯子が「人とはゞ落葉衣のあ

りとこたへん」と答えると、活所は「わろしく」とつまはじきをしたという。両者の闊達なやりとりが印象的な場面である。ここで長嘯子が詠じたものが20の歌であり、この和文部とは別に、『拳白集』巻四雜部に「題しらず」として収められているのである。

「木の葉みだりがはしく衣もうすきに」として、木の葉の散り乱れる様を描写し、かつ衣服の貧相なことを言っていることから、「落葉衣」はやはり、落ち葉を衣にするような粗末な衣服で寒さを凌ぐとする侘び住まいの様を言おうとしているのである。なお「那波道円につかはすことば」の後続の場面では、翌朝に活所から長嘯子の元へ衣が届けられたことが記されている。

そして長流は、おそらくこの和文を念頭に置きつつ次の歌を詠んだのであろう。

23 山風の柴の袖垣吹くたびに落葉衣の破れそひつ、

〔晩花集〕一二七六、「山家の心を」中の一首

山風が柴で編んだ粗末な垣根に吹き付ける度に、「落葉衣」の破れはひどくなっていく、という。「袖」と「衣」の縁語によって上の句と下の句を繋いでいる。ここでの「落葉衣の破れそひつ、」は、葉が散って行く様を、風に破れていく衣に例えたものかと思われるが、一方で山家に暮らす侘び人の衣が擦り切れていく様をも背景として描いているのであろう。21の『後撰集』歌よりは20の長嘯子歌

に内容が近く、また「那波道円につかはすことば」のうち、「木の葉みだりがはしく」という情景をも思わせる。「落葉衣」もまた、長嘯子の表現に影響された結果の用例であると見たい。

なお、22の中には「隣のかたの鼻もなどひざらんとわびし」という一文があった。この部分は次の『古今集』の歌による。

24 出でてゆかむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな

〔雑体・誹諧歌・一〇四三〕

門出に際して「鼻をひる」、つまりくしゃみをするのは縁起が悪く、行こうとしていた人は出発を見合わせるといふ俗説があったと言われる。24の歌は、隣の家の人でもくしゃみをしてくれれば、今旅立とうとするあの人をとどめることもできるのに、そうなつてはくれない、と嘆いた誹諧歌である。¹¹⁾22ではこれを踏まえ、長嘯子は活所が出て行こうとするのを、隣の人がかくしゃみをして留めてくれたら良いのに、そうはしてくれず別れが寂しい、と言ったのである。この「隣の方に鼻もひぬ」を、長流は次のように歌に用いている。

25 しひて行く年をとゞめむ今夜だに春の隣に鼻もひぬかな

〔晩花集〕冬・一〇二二

歳暮の詠で、過ぎ去る年をとどめようにも、隣の人はいくしゃみもしてくれない、という。「春の隣」は「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」(雑体・誹諧歌・一〇二二)を典拠とす

る詞で、春がすぐ近くまで来ていること。この「春の隣」の「隣」、及び「花」と同音の「鼻」によって、長流は「隣に鼻もひぬ」と続けている。他に「隣に鼻をひぬ」といったことを詠んだ和歌は見出せず、この俗説を用いた稀な歌例と言える。(25)が24の本歌取りであることは明白だが、それを実践しようと考えるに至ったのは、(22)の場面で見られるこの表現に触発されたためではないか、とも考えられてくる。

次の「月の宮人」の語は、長流に三首の用例が見出せる例である。

(26) 天雲を物越しにてもなぐさめむ声だにかはせ月の宮人

(27) 浮き雲を今宵の空に撫で果てて袖さやかなる月の宮人

(28) 下照らす影もかゝるを天のうらにたぐひあらめや月の宮人

〔晩花集〕秋・六八四・六八八・六八九

月に架空の都である「月の都」を想定し、そこに住む人々を「月の宮人」と呼ぶ。(26)では雲に隠れた月に対し、せめてその雲を隔てても月の宮人と会話をして無聊を慰めたいという思いを詠む。(27)は月が雲もなく美しく見えるのは、月の宮人が袖で雲を払い尽くしたからか、とし、(28)は地上を照らす月の光も十分に明るく美しいのだから、月の宮人達はさぞかし明るく輝く光を見ているのだろう、と幻想的な世界を詠む。一方長嘯子には、

(29) 我ゆゑの涙と袖に宿らずは無き名や立てん月の宮人

(30) 竹取のよよの昔は跡ふりて面影残る月の宮人

〔挙白集〕秋・九五・九五六

という二首の用例がある他、『挙白集』巻六には「月の宮人」と題された小編が収められている。和文「月の宮人」は、秋の夜に月を眺めていると、知らぬ間にこぼれた涙が甕いっぱいに満ちていた、という文章の後に、次の二首が記される。

(31) ながむればあやにこひしく物ぞ思ふ我がさきの世や月の宮人

(32) または見じのこの世の秋と思ふよりさらぬ別れぞ月に悲しき

このうち(31)の歌では結句に「月の宮人」が用いられている。(31)は、月を眺めていると何とすることもなく恋しく物思いに耽ってしまったのは、私の前世が月の宮人であったからだろうか、という、『竹取物語』の世界を背景として詠まれた歌である。長嘯子の和文の中では、現実と空想とが交じり合った印象的な一篇である。

「月の宮人」の語自体は、新古今歌人である藤原良経、藤原家隆に見られた後、室町期に正徹や正広が多く用いている。そのため、長流の「月の宮人」の例が、『挙白集』を契機としているとは必ずしも言えないが、和文の章題にもなっているという点を考えれば、やはり『挙白集』の用例に刺激されたのではないだろうか。

なお、同様の例として、

(33) こゝに猶き、ぞおどろく時鳥ひとのみかどの玉の一声

〔晩花集〕夏・三四一

に見える「玉の一声」も挙げられる。やはり『琴白集』巻十に「玉の一声」の題の小編があり、その末尾に

34 浜千鳥跡を千年の形見とは残さぬものの玉の一声

の歌が置かれる。和文「玉の一声」は、藤原家隆真筆の和歌懐紙一軸を見てその喜びを一首に綴ったとされるものである。「玉の一声」の語は漢語「玉声」を和語に和らげた表現と見られ、長嘯子、長流以外にその用例を見出せない。また、34では千鳥の声を、33では時鳥の声を「玉の一声」と表しており、鳥の声の表現に用いているという点が一致している。長流が34の歌を意識して33の歌を詠んだ可能性は高い。

このように、『琴白集』和文部もまた、長流の和歌詠作に影響を与えたと見られる箇所が認められるのである。

終わりに

以上、『琴白集』歌集部と和文部のそれぞれについて、長流が影響を受けたと見られる箇所を指摘した。ところで、先行する和歌を背景として新たな和歌を詠み出せば、それは本歌取りとなり、和文であれば本説取りと呼べるものになるはずである。それでは、長流は長嘯子の作品の本歌取り、本説取りを行ったと言えるのだろうか。

例えば、藤原定家『詠歌大概』には「近代之人所詠出_レ之心・詞、雖_レ為_二一句_一謹可_レ除_レ棄之_一」(七八十年以来人之歌、所詠出_二之詞_一、¹³努々不可_レ取用_一)という一節がある。あまりに近い時代の人が詠んだ和歌については、その独自の詞や内容を取り用いてはいけない、と定家は述べる。この言葉に従うならば、長嘯子歌を長流が本歌取りするには、あまりに時代が近過ぎる。本稿冒頭に挙げた「長嘯子を賛する歌」の「後瀬山」の歌についても、長流にとっては本歌取りという意識ではなかったであろう。例えば本稿では「花踏む鳥」「竹馬」「犬上」「床の山川」「落葉衣」といった語に注目したが、これらはいずれも古歌に用例・類例のある詞であり、長嘯子独自の発想によるものとは言い難い。また、長流は古歌の用例にも精通していることから、こうした詞が長嘯子以前に用いられていたということとを理解していたということも十分に考えられる。本稿ではこれらの詞を用いることで長流が長嘯子歌の本歌取りを行おうとしたのではなく、長嘯子の歌が、特定の詞を歌語として利用する契機を長流にもたらしたものと考えたい。第二章で取り上げた、長嘯子の和文に見られる典拠を長流が和歌に用いた例についても同様に、長流は長嘯子の和文を本説として用いたのではなく、あくまでもそこに見られる典拠を和歌に取り入れようとしたのである。実際、長流の和歌は長嘯子の歌や和文を想起させようとしているわけではな

く、むしろそこに別の趣向を組み合わせて新たな表現を得ようとしている。

古歌や物語、その他多くの文芸に使われてきた数多の詞の中から、和歌の素材として利用できるものを見極めるのは、たとえ歌道において自由な立場にあった地下の世界でも、困難なものであったろう。長流にとっては、ある語が長嘯子の和歌や和文に用いられるという経路を通ることで、自らの詠作に摂取可能な素材として目に入りやすかったのではないだろうか。『萃白集』に見られる語や典拠が『晩花集』において時に幾度も繰り返し用いられている背景には、こうした状況があったものと、今は考えておきたい。

このことは、長嘯子から長流への影響という個別的な問題だけでなく、趣向の枯渇に喘いでいた当時の歌人達の詠作活動に広く関わる問題として見るのが可能であろう。例えば、長流と親しく交わり、同様の歌風を持つと評される契沖の例ではあるが、次のような歌が契沖の家集『漫吟集』にある。

(35) 御吉野の滝の白玉つきせねば花踏む鳥に打つかとぞみる

(五一九)

この歌は第一章で取り上げた(2)の古今集歌を本歌取りし、さらに「御吉野の滝の白玉知らねども語りしつげば昔思ほゆ」(『古今和歌六帖』巻五・二八九八)などに見える「吉野の滝」を取り合わせた

歌である。「打つ」の語から明確に(2)の歌を本歌取りしていることが分かるが、「花踏みしだく鳥」を「花踏む鳥」と表現したのは契沖独自の発想であろうか。それよりも、長嘯子と長流の用例に影響されたものと見た方が妥当であろう^⑧。新たな歌材を求める近世歌人の一つの方法として、こうした同時代歌人からの摂取を認めることができる。

〈本文引用にはそれぞれ次の資料を用いた。なお、特記しない限り和歌本文の引用は『新編国歌大観』によるが、適宜漢字、仮名の表記を改めた。歌番号は本文引用に用いた各資料によった。〉

・『晩花集』：久保田淳監修・大山和哉・鈴木健一・田代一葉・田中仁著『和歌文学大系六九 晩華和歌集／賀茂翁家集』(明治書院、二〇一九年。ただしルビは省いて掲出した。)

・『萃白集』：同志社大学文学部蔵『萃白集』慶安二年刊本

・『万葉集』：佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集(一)』(五)『(岩波書店、二〇一三)』二〇一五年)

・『列子』：『新釈漢文大系三二 列子』(明治書院、一九六七年)

・『詠歌大概』：橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『新編日本古典文学全集八七 歌論集』(小学館、二〇〇二年)

注

- ① 久保田淳監修・大山和哉・鈴木健一・田代一葉・田中仁著『和歌文学大系六九 晩華和歌集／賀茂翁家集』（明治書院、二〇一九年）の「晩華和歌集」解説のうち、「一 下河辺長流の生涯」参照。
- ② 『校註国歌大系 第十五卷』（国民図書株式会社、一九二八年）「自撰晩花集」解題。
- ③ 高浜充「長流歌学の時代性——下河辺長流の歌学および和歌の近世的意義について——」（『国文学研究』四号、一九六八年一月）。
- ④ 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「長流」の項、執筆担当著村上明子。
- ⑤ 『林葉累塵集』では詞書を「田家花といふことをよみたまへる歌」とする。
- ⑥ 『聞書集』『新撰和歌六帖』の二首は『夫木抄』にも載る。
- ⑦ ただし『古今集』では「犬上の鳥籠の山なる名取川いさとこたへよ我が名もらすな」とある。
- ⑧ 『山海経』にも同様の逸話が見られる旨、『萃白集』を読む会・大山和哉・岡本聡・雲岡梓・鈴木淳・中嶋隆・復本一郎・藤江峰夫『萃白集』評釈（二）巻七（『近世文芸 研究と評論』第九七号、二〇一九年一月）に指摘がある（担当雲岡梓・復本一郎）。
- ⑨ 「落ちば」を「落ちたならば」と解する説もあるが、後に挙げた「那波道円につかはすことば」の内容より、長嘯子は「落葉衣」と理解していたものここでは考えておく。なお、北村季吟『八代集抄』の当該歌に対する頭注には「木の間の月に葉の影の身にうつるは落葉衣と也。一説、零羽衣、誤也。」とある。
- ⑩ ⑧前掲論文（十六）那波道円につかはすことば（担当鈴木淳）参照。
- ⑪ 「鼻をひるはいむ事侍れば、行人もしやとまると、となりにはなをひよかして云心也。」（『両度聞書』寛永十五年（二六三八）刊本）
- ⑫ ⑬の「ひとのみかど」は異朝のことで、ここでは蜀国の王杜宇の死後、その魂が時鳥に化したという故事を踏まえている。また、「玉の一声」の「玉」には「魂」の意が掛けられていると見られる。「不如帰／蜀国ノ王、名ヲバ杜宇ト申、成都（蜀都也）ヲ出テ旅ニシテ死ス。其魂、鳥ト成テ、春夏ニ鳴。コレヲ思婦鳥ト号ス。（中略）皆郭公ノ古事也。」（『連集良材』寛永八年（二六三一）刊本）
- ⑬ 長流にも教えを受けたという国学者今井似閑が、諸氏の言行を聞書したと見られる『諸説録』には、長流の言として「定家卿も、和歌に師匠なしとの給へるも、ふるき歌どもを、よく見あきらめば、余にもとむるに及ぶまじと也。」（川平敏文・勝又基「翻刻『諸説録』——元禄和学の諸相」（『近世初作文芸』第一八号（二〇〇一年二月））による）とある。これは『詠歌大概』に見える「和歌無師匠。只以旧歌為師。」という部分に基づいた言葉であり、長流が『詠歌大概』を用いて歌道の要旨を説くことがあったと知られる。
- ⑭ 『新編国歌大観』において「花踏む鳥」の用例が見られるのは『萃白集』三三四（1）、『漫吟集』五一九（35）及び五九七（しめはふる杜とも知らずなれにけり花踏む鳥は神やいさめぬ）の三首のみである。『晩花集』二〇二（3）は『新編国歌大観』の底本である文化十年刊『晩花集』未収録。なお、(3)の長流歌と⑬の契沖歌のどちらが先行するものかは不明であるため、あるいは長嘯子↓契沖↓長流という流れも考えられるし、長流、契沖の双方が共に(1)の長嘯子歌を意識していた可能性もある。